

条件表現の連体修飾用法 —その意味解釈を中心に—

杜暁傑

接続助詞「ト・バ・タラ・ナラ」で表される条件表現は、一般的には条件を表す従属節と帰結を表す主節で成り立つとされているが、本稿は、条件表現が「バ・タラ・ナラ＋ノ＋主名詞」の形式で連体修飾に使用される現象に着目し、Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4:1-38 などが提唱した参照点構造を用い、その意味がどのように解釈されるかについて考察し、「条件節＋帰結節」という一般的な用法との関係についても論じる。

「朝日新聞記事データベース 聞く蔵Ⅱ」を使用して用例を集め、調査を行った。その結果、条件表現の連体修飾用法には、帰結の内容、またはその一部が主名詞で表現される「条件-帰結型」と、帰結の内容が言語化されず、読み手の言語知識または百科事典的な知識によって補完される「帰結潜在型」という 2 種類のもので存在することがわかった。また、条件表現の連体修飾用法の意味解釈には、条件-帰結関係、そして修飾部と主名詞の意味関係という 2 つの関係を特定する必要がある。先行研究では、条件-帰結関係の特定には帰結節の復元が必要とされ、修飾部と主名詞の意味関係の特定には、その関係の分類が必要だとされているが、本発表は、その 2 つの関係はいずれも参照点構造によって説明できることを論証した。そのため、条件表現の連体修飾用法は、「条件節＋帰結節」という一般的な用法から派生したものではなく、それ自体に自立性を有するものだと主張した。